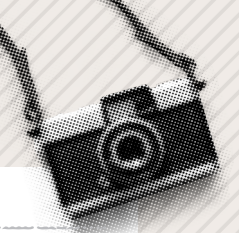




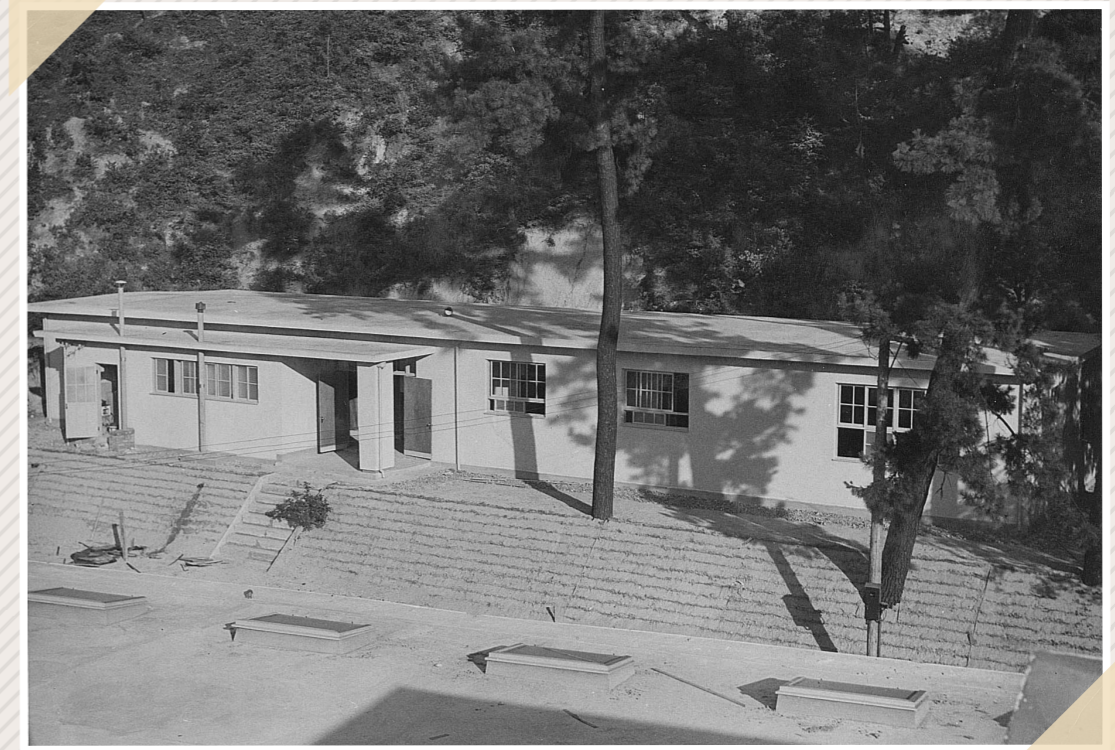
OKAYAMA  
UNIVERSITY



岡大 OU Pictorial History

モノクローム #14

1枚の写真から紐解く、岡大の歴史。  
誰かにそっと教えたいくなる…そんなエピソードとともに紹介します。



落成当時の玉野臨海実験所 1953(昭和28)年8月

1953(昭和28)年7月、瀬戸内海を望む玉野・洪川の地に、岡山大学理学部附属玉野臨海実験所が落成しました。写真に写る建物は、研究室や実習室、学生の宿泊室を備えた、当時としては貴重な学びの拠点です。香川県の本島から移転したこの実験所には、研究と教育への熱意、そして地域の厚い支援が注がれていました。やがて、より海に近い環境を求め、臨海研究の舞台は牛窓へと移ります。穏やかな海とともに歩む岡大の研究の系譜は、今も場所を変えながら受け継がれています。

(参考:岡山大学二十年史/岡山大学史 昭和44年~昭和54年)

月を見上げていた少女が、  
月を観測するまで



CONTENTS

現場発! 医療アイデア最前線  
岡山大学災害支援学生チーム「Aegis(イージス)」の活動  
ちょっと見てほしい、臨海実験所。  
好き!で輝く岡山大学の学生たち OU NAVI

Vol. 111

2026



## 岡山大学広報 いちよう並木

より良い広報誌を作成するために、皆さまからのご意見・ご要望をお待ちしております。

発行 : 岡山大学 総務部 広報課

〒700-8530 岡山市北区津島中一丁目1番1号

Tel. 086-252-1111 Fax. 086-251-7294

E-mail [www-adm@adm.okayama-u.ac.jp](mailto:www-adm@adm.okayama-u.ac.jp)

<https://www.okayama-u.ac.jp>

岡山大学

検索



読者アンケート  
実施中!

抽選で2名様に  
岡山大学オリジナルグッズ  
「地図柄マグカップ」  
プレゼント!

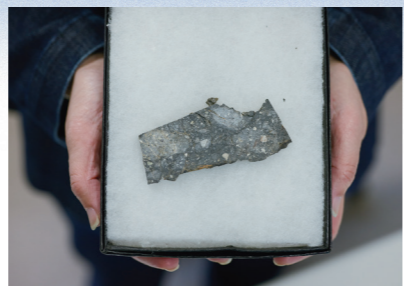


月を見上げていた少女が、

# 月を観測するまで

日本人初の快挙、コラディーニ賞受賞の先に

2025年7月、学術研究院  
先鋭研究領域(惑星物質研究所)の  
大竹真紀子教授が、惑星科学分野の国際的な賞「コラディーニ賞(Coradini Award)」を受賞した。同賞は、NASAの太陽系探査研究バーチャル研究所(SSERVI)が毎年授与するもので、太陽系探査分野における長期的かつ卓越した貢献をたたえる名誉ある賞だ。日本人研究者の受賞は初めてだった。受賞は、アメリカ・ニューメキシコ州で開催された「NASA探査科学フォーラム2025(現地時間7月22~24日)」で発表された。オンラインでのスピーチに臨んだ大竹教授は、喜びとともに、これまで関わってきた探査ミッションの仲間たちへの感謝を語り、「将来は、宇宙飛行士による月面での岩石採取を支援する研究がしたい」と、次の夢を口にした。



『なんでだろう』が、すべての始まりでした。

## 好奇心は、身の回りから始まった

大竹教授の好奇心は、幼いころから身の回りの自然に向いていた。どんぐりを拾うのも、ただ集めるだけではなかった。拾い集めたどんぐりを袋に入れて家に置いていたところ、しばらくすると袋がふくらんできた。「これは何だろう」。やがて芽が出て、理科で習った「発芽のとき」にはガスが出る」という知識と、目の前の出来事がつながり、はっとしたという。

砂糖の結晶づくりも同じだった。理科の実験でミョウバンや塩の結晶を見て、「それなら砂糖でもできるのでは」と考え、自宅の台所で実験を始めた。砂糖水を煮詰め、糸を垂らし、日々変化を確かめる。知ったことを、自分の手で確かめずにはいられない——そんな追究心が、すでに芽生えていた。

## 時代とともに、興味は宇宙へ

やがて関心は空へ、そして宇宙へと広がっていく。NASAの探査機ボイジャーが、火星や土星へ向かい、次々と成果を上げていた時代。天文学者カール・セーガンが監修したテレビ番組『コスモス(COSMOS)』が放送され、宇宙の話が家庭に届いていた。

1980年代初め、ある科学の本をお小遣いで買い、夢中で読んだ。その巻末には、日本人初の宇宙飛行士を募集する要項と応募用紙が綴じ込まれていた。そのページを何度も眺めた記憶は、今も鮮

## 高校で「見る」から「やる」へ

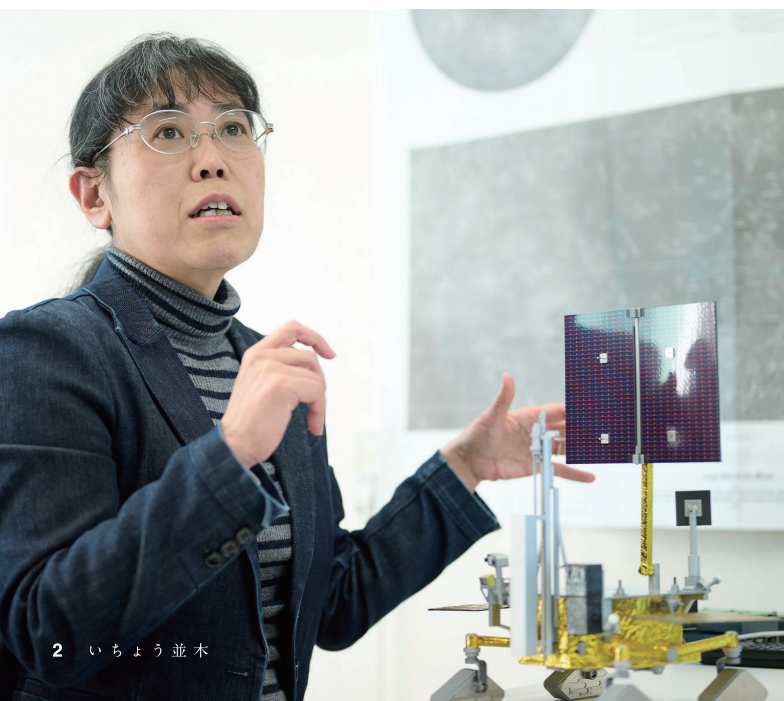
高校では天文部に所属。手動で望遠鏡を調整し、夜通し星を追いかける日々であった。写真の撮り方から暗室での現象まで、先輩たちに教わりながら身につけていった。

それまで本や映像で「知る」だけだった宇宙を、自分の手で「観る」体験。できることが一気に加え、理系大学への進学への思いは、ますます強くなっていった。

## 進路に迷いながら、地球の研究へ

東北大学進学にあたっては、「実家を離れて自立したい」という思いもあった。星つながりで知ったグライダー部にも惹かれ、体験で初めて上空を旋回したときの楽しさに心を奪われた。宇宙飛行士がISS(国際宇宙ステーション)へ向かい、帰還時にはグライダーのように着陸する——そのイメージも重なり、卒業まで4年間、グライダー部で活動した。

研究テーマとして選んだのは岩石学。小学生のころ、望遠鏡で見た月のクレターが「どうやってできたのだろう」と不思議でならなかったこと、誰がどのような気持ちでそれを研究しているのかを知りたいと思ったことが原点にあった。物理学者でサイエンスライター





の竹内均さんのテレビでの解説も、記憶に残っていた。

大竹教授が知っていたのは、「一番古い時代の地球」。地球も宇宙の一部だからこそ、宇宙そのものをもっと理解したいという純粋な思いがあった。しかし地球では、誕生から最初の約8億年にできた岩石が、ほとんど残っていない。どうしても空白が生まれてしまう。



大学時代の野外実習。溶岩地帯で岩石を観察する大竹教授。

### 月探査へ——誰もやっていないことに挑む

そこで注目したのが月だった。月は、太古の地球に巨大な天体が衝突して生まれたと考えられており、地球では失われた太古の記録が残っている可能性がある。

転機となったのは、月探査機「かぐや」の計画だった。就職先が定まらないうち、観測装置をメーカーと開発する支援業務の募集を知り、応募。宇宙開発事業団（NASDA、現JAXA）に出向する形で、探査機開発とデータ解析に携わることとなる。

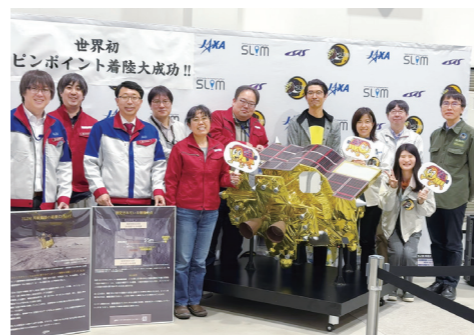
惑星探査は日本では前例が少なく、分からないことだらけ。それでも先輩たちに教わりながら、「昨日と同じだと、しんどくなる」という言葉を胸に、小さな進展を積み重ねていった。性能を決め、設計し、試作し、不具合を直す。

子どものころに見上げていた月へ、自分たちが作った装置を運ぶ——日本ではほとんど誰もやっていないことに挑むロマンが、そこにあった。中でも印象深いのが、海外メーカーとの直接交渉。開発遅延をめぐり現地に出向き、真正面から話し合う中で信頼を得た経験は、「押すべきところは押す大切さ」を実感する出来事となった。

### 失敗と挑戦、その先にSLIMがあった

「かぐや」の次に構想された「SP「[ENSE(セレーネ2)は、月面着陸と近接探査を目指す計画であったが、実現には至らなかった。それでも挑戦は途切れることなく、小型月着陸実証機「SLIM(スリム)へと引き継がれた。SLIMの最大の目的は、高精度着陸技術の実証である。小型・軽量の機体で、月面の狙った地点に降りる——それ自体が大きな挑戦だった。機体の質量には厳しい制約があり、「限られた質量の中で、観測装置を搭載する価値があるのか」という議論も起こった。

大竹教授は、観測機器そのものではなく、研究全体を支える「パイロードマネージャー」として参加。



SLIMの月面着陸とマルチバンド分光カメラの観測を終えた後の観測チーム。目的を達成し、笑顔があふれた瞬間。

『好き』が、すべてをつないでました。

その中で、なぜ観測が必要なのか、どのような科学的意義があるのかを丁寧に説明し、交渉や調整に奔走した。マルチバンド分光カメラの開発では、重量との闘いが続いた。

着陸当日、SLIMは想定外の姿勢で着陸し、太陽光パネルに光が当たらない状況に。蓄電池に残された電力は約1時間。その限られた時間を、観測に充てる判断が下された。それでも予定していた分光観測は叶わず、「ここで終われば、8年間の努力が無駄になる」。青ざめる思いだったという。

1週間後、太陽の角度が変わり、SLIMが再び目を覚ました瞬間、皆飛び上がった。運用室では、疲れ切った帰宅していた仲間たちが、知らせを聞いて次々と戻ってきた。論文を書けるだけのデータが得られたこと、そして仲間の姿が、何より心強かったという。

### 月探査は、まだ続く

現在、大竹教授はSLIMのデータ解析を続け、地球や月がどのように形



学術研究院先鋭研究領域  
(惑星物質研究所)  
教授

## 大竹 真紀子

OHTAKE Makiko

■専門分野／惑星科学・リモートセンシング

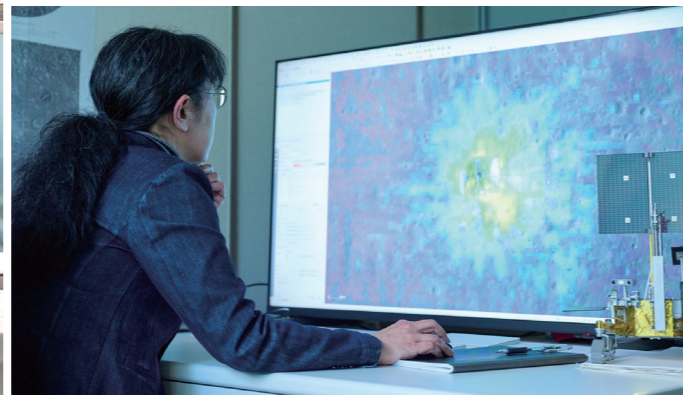
1967年、兵庫県神戸市生まれ。東北大学大学院で博士(理学)取得。宇宙開発事業団(NASDA)、宇宙航空研究開発機構(JAXA)宇宙科学研究所助教、会津大学教授を経て、2025年4月より岡山大学先鋭研究領域教授(特任)。月探査機「かぐや」搭載のマルチバンドイメージャー開発責任者を務めるとともに、小型月着陸実証機「SLIM」ではパイロードマネージャーを担当。

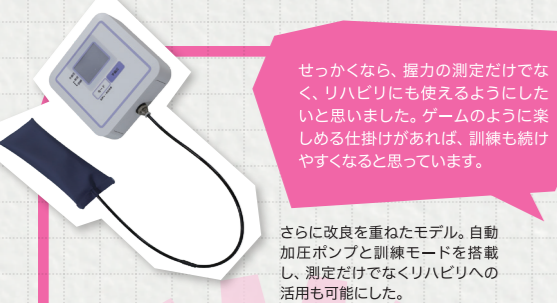
成されたのかを理解するため、巨大衝突がどのような条件で起きたのかの推定を目指している。その成果は、次の月探査につながっていく。視線の先にあるのは、月南極域を探る「LUPEX(ルベックス)」。水や氷を調べること、地球の水の起源に迫ろうとしている。

### 「好き」が、すべてをつないでくれた

大竹教授は言う。「研究者になりたいと思ったことは、一度もありません。面白いから、もう少し知りたい。その好奇心の連続が、ここまでつながってきただけだ。

苦しいときも、楽しいときも、原動力は「好き」。遠回りに見える経験も、すべてが今につながっている。「高校生や若い人には、将来の肩書きを先に決めなくてもいい、と伝えたい。好きなことを、面白いと思えることを、突き詰めてほしい」。月を見上げていた少女は、今も同じ気持ちで、月を見つめ続けている。





せっかくなら、握力の測定だけでなく、リハビリにも使えるようにしたいと思いました。ゲームのように楽しめる仕掛けがあれば、訓練も続けやすくなると思っています。

さらに改良を重ねたモデル。自動加圧ポンプと訓練モードを搭載し、測定だけでなくリハビリへの活用も可能にした。

### この研究が、めざす先

握力は、単なる“力”ではありません。握れるということは、動けるということ。活動量が増えれば、生活の質も変わります。ICUでは、人工呼吸器をつけた患者さんが、この機器を使って握力訓練に取り組むこともあります。「測る機械」が、その人の“生きる力”を支える存在になる。そんな可能性が少しずつ広がっています。



## 「水俣条約により、水銀を使った医療機器が使えなくなった2020年、長年診療で使ってきた握力計も突然使えなくなりました。」

握力は、関節リウマチの患者さんにとってとても大事な指標です。日常生活がどの程度できるか、治療がうまくいっているか。ずっと同じ方法で測り続けてきました。「じゃあ、どうする？」測れないままにするのではなく、私は“作る”という選択をしました。最初は、水銀に代わる方法に変えれば済むと思っていました。でも実際に考え始めると、問題はそこだけではありませんでした。リウマチで変形した手でも握れる形であること。毎回きちんと消毒できること。診療の流れの中で自然に使えること。医療現場で本当に使える形を、学内の産学連携担当や企業と何度も議論しながら、少しずつ形にしていきました。現在は全国20施設の協力を得て、試験的な運用を進めています。「早く販売してほしい」という声をいただけるのは、本当にうれしいですね。



2020年まで使われてきた水銀式握力計(右)と、最初の改良モデル。水銀から空圧へ、アナログからデジタルへと、大きな転換が図られた。

## 02 困りごとを、そのままにしない

医療技術部(総合リハビリテーション部門)

藤岡 晃 さん(作業療法士)  
FUJIOKA Akira

医療者だけで考えてもだめです。工学の視点だけでもだめ。どう使われるかまで一緒に考えないと、いい機械にはならないと思っています。

### アイデアの種は、日常の中に

私は、機器を“使う側”であることを大切にしています。学会では展示ブースを自分の目で見て回りますし、企業の方ともできるだけ直接話そうとしています。「これは本当に現場で使えるのか?」「どうしたら続けてもらえるのか?」完成させることよりも、使われ続けることのほうが大事だと思っています。困っていることがあれば、まずは言葉にしてみる。そこから、次の形が生まれると信じています。

## 03 口の機能チェックを、もっと手軽に 予防を、もっと身近に

予防歯科学  
江國 大輔 教授チーム  
EKUNI Daisuke

機械も使っていますが、往診や施設では設置や電源の確保に配慮が必要です。もう少し簡単になれば、もっと多くの場面で評価できると思いました。

### 「7つの機能を評価するんですが、準備だけで大変なんです。」

口腔機能低下症の評価では、口腔衛生状態、口の乾燥、咬む力、舌の動き、舌圧、咀嚼、嚥下という7つの機能をそれぞれ測定します。たとえば咀嚼機能を見るためには専用のグミを噛んでもらいますし、水を使う検査もあります。評価自体はとても大切ですが、器具の準備や管理に手間がかかるのも事実です。もっと簡単に評価できないか。その思いから、画像や動画を活用したアプリ開発に取り組んでいます。舌の状態を撮影し、咀嚼の様子を解析して数値化します。将来的にはAIを活用した判定システムの開発も視野に入れ、研究を進めています。目指しているのは患者さん向けのアプリではなく、まずは医療従事者が診療の際に簡便に使える医療機器(アプリ)です。院内だけでなく往診でも活用できる形にし、評価の負担を減らしながら、予防につなげていきたいと考えています。

7項目それぞれに検査方法があり、使う器具も異なります。評価は重要ですが、準備や管理に手間がかかるのが現状です。



## 「検査って、結果が出るまで待つ時間がどうしてもありますよね。その時間を、できるだけ減らしたいと思ったのが出発点でした。」

病気の診断をすぐにしたいときには、どうしても見た目での判断になってしまいます。そこで私は、腸の炎症や病気の状態を反映するリンパ球に着目しました。リンパ球の性質を詳しく調べれば、病気の種類や状態をより正確に捉えられるのではないかと考えました。使うのは「フローサイトメトリー」という解析法。血液内科では広く用いられていますが、消化器内科の日常診療で活用されることは多くありませんでした。それを現場で使える形にできないかと模索しています。

※フローサイトメトリー：細胞にレーザー光を当て、その性質を解析する方法。血液の病気の診断などに広く用いられている。

顕微鏡での診断はとても大切ですが、結果が出るまでにおよそ1週間かかります。その時間を短くできないかと考えました。

胃カメラの検査中にそのまま細胞を採取できます。検査室に送れば、その日のうちに解析が可能です。

### この研究が、めざす先

その場で結果が分かれば、治療の判断もその場でできます。患者さんにとっても、医療者にとっても、迷う時間が減る。それだけでも、医療はきっと少し優しくなると考えています。診断が特別な工程ではなく、日常の診療の延長にあるものになる。それが実現できれば、医療の質を、確実に一歩前に進められると信じています。

血液内科や病理部と相談しながら進めています。分野を超えて試せるのは、大学病院ならではのメリットだと思います。

## その場で診断できる医療を、現場からつくる

### アイデアの種は、日常の中に

忙しい毎日ですが、家族と過ごす時間は大切にしています。平日の夜、時間があれば中学生の息子と走っています。走っていると頭が整理されて、研究のことをふと考えることもあるんです。買い物に行けば、雑貨売り場やホームセンターをつい見て回ってしまいます。“これ、使えないかな”と。身近なものでできることを増やしたい。その発想が、診療現場での工夫につながっているのだと思います。

消化器内科  
岩室 雅也 助教  
IWAMURO Masaya

リンパ球を分離する工程でも、特別な装置は使っていません。茶こしとプラスチック容器、注射器。身近なものを活用しながら、安全性や再現性を検証しつつ、極限まで簡便にしました。



### この研究が、めざす先

口腔機能の低下は、全身のフレイル<sup>※</sup>や要介護リスクとも関係しています。だからこそ、早い段階で気づくことが重要です。大学病院の中だけで完結するのではなく、地域の歯科診療所や介護現場でも活用できる形へ。評価が身近になれば、予防が広がり、健康寿命の延伸にもつながる可能性があると考えています。

※フレイル：加齢により心身の機能が低下し、要介護状態に近づいている状態。

簡単に測れるようになれば、検査のハードルが下がります。予防に取り組むきっかけも、自然と増えていくはずですよ。

### アイデアの種は、日常の中に

学生の頃、将来求められる歯科医師とは何だろうと考えました。すでに病気になった方を治すだけでなく、病気になる前に防ぐことにも関われないか。その思いが、私が予防歯科を選んだ理由です。チームのメンバーの中には、「歯医者が苦手だからこそ、予防を広げたい」と話す人もいます。きちんと予防ができていれば、怖い思いをすることも減る。そこに貢献できたらいいと、私も思っています。研究室では、立場に関係なく意見を出し合っています。思ったことは遠慮なく言ってくれています。そうしたやり取りの中から、新しい発想が生まれることも多いんです。





# 災害支援学生チーム [エイジス] Aegis

## 防災を、特別なものにしな

Aegisの一つの柱は、防災教育だ。まずは応急手当や避難所設営などを、他大学で同様の活動を行う学生とも交流しながら、メンバーが楽しんで学ぶ勉強会を重ねてきた。

さらにメンバーの動きかけにより、医学部医学科・保健学科・歯学部での講義の中に、防災を扱う時間が組み込まれる予定だ。原さんには、興味の有無にかかわらず、防災に触れる機会を広げていきたいという思いがある。防災を続けるには、個人の熱意だけでなく、制度として根付かせることが欠かせない。



応急手当や避難所設営を実践的に学ぶ勉強会。

佐永さん(左)と原さん。日常の会話の中から、活動のアイデアが生まれている。



## 軸は、岡山大学の防災力を高めること

Aegisの活動の目標は二つ。岡山大学の学生の防災力を高めること、特に鹿田キャンパスの学生が、災害発生時に地域の中心になって動ける人材となることだ。学外で目立つことよりも、身近な場所を確実に変えることを大切にしている。

原さんの出発点は、災害医療だけに向き合うことへの疑問だった。災害が起きてから対応するより、普段から防災ができていれば患者は減り、医療の負担も軽くなる。災害医療に関心のある人が、防災を「当たり前」に考える。そんな状態を目指している。



定期的実施している防災ワークショップ。

## 学生だから、病院を支えられる

もう一つの柱は、災害時の病院支援だ。災害が起きると、医療従事者は医療以外の対応にも追われる。そこを、その地域をよく知る学生が支えられないか—その発想から、Aegisは学生主体のボランティアセンター運営に挑戦している。

目指しているのは、病院側のニーズと学生を結びつける仕組みづくり。「誰が、どこで、何をするのか」を整理し、学生が「動ける戦力」として機能する体制を整えようとしている。

2025年9月に行われた岡山大学病院の防災訓練には、そうした取り組みの検証も兼ねて参加した。作成したボランティアセンター運営マニュアルが、情報伝達や役割分担の面で本当に機能するのかわかめるためだ。現在は、活動を支えるための助成金獲得にも取り組み、月1回の病院の災害対策会議にも参加している。



岡山大学病院の防災訓練に参加。学生が「動ける戦力」になるための検証。

## 「備える」が、当たり前になる未来へ

「防災って、意識が高い人だけのものじゃない」。佐永さんはそう話す。授業に組み込まれれば、誰もが平等に向き合うテーマになる。考えることも、備蓄することも、特別じゃなくなる。

発足から1年。「備える」が当たり前になる未来を描きながら、Aegisの挑戦は確実に、鹿田キャンパスの日常を変え始めている。

## 知らなかったから、始めた

代表で医学部医学科4年の原菜々瀬さんが防災に本格的に向き合うようになったのは、3年の冬。災害医療には関心があったものの、防災について特別な知識があったわけではなかった。避難所と避難場所の違いすら、当時は分からなかったという。

「もしかしたら、自分の周りの大学生も分かっていないのでは」。そんな思いから、医学部医学科のカリキュラムである医学研究インターンシップの一環として、大学生向けの防災講義を実施した。参加者は約60人。講義後は「水を買いました」「備蓄してみました」という声が返ってきた。

原さんが感じたのは、危機感に加えて生まれた「気づき」だった。「行動って、きっかけがあれば想像以上に簡単に変わるんだ」。この実感が、Aegisの原点になっている。



防災と向き合い始めた頃の原さん。学生自身が地域を護る存在になりたいという思いから、古代ギリシャ神話の「神々の盾」を意味するAegisをチーム名に選んだ。

## 続けたい。だから、団体にした

一度きりの講義で終わらせたくない。そう思った原さんは、Aegisを立ち上げた。目標は、まずは10年続くこと。数十年以内に起こるかもしれない大災害に備えるには、単発の活動では足りないと考えたからだ。

最初に声をかけたのは、現在副代表を務める医学部保健学科3年の佐永陽奈子さん。佐永さんは「原さんの本気度に、自然と引っ張られていった」と話す。その熱量に共感した仲間が集まり、現在は約36人が活動している。「災害に興味はあるけど、1人では動けなかった」。そんな思いが、Aegisという「箱」に集まっていった。

原さんの思いに共鳴した仲間たち。Aegisは組織として動き始めた。





#### 4 排水用の穴

水槽室の排水用の穴は、研究内容に即した特別な仕様となっています。遺伝子組み換えメダカなどが外部へ流出しないよう設計されています。



ここに注目!  
安全面まで考えた  
専用設計



ここが変わった!  
飼育環境を  
支える温度と光



ここに注目!  
ひねれば海水が使える  
研究環境

#### 5 海水蛇口・ボトル

室内の蛇口からは、目の前の海からくみ上げた海水がそのまま使えます。メダカなどの活餌として使うブラインシュリンプの孵化なども、ひねるだけで準備が完了。排水や配管は水槽室専用に設計され、現場の声が反映された設備です。地味ながら、日々の作業効率を大きく高めています。



#### 6 小型水槽の部屋

日本のメダカを中心に、海外産を含む多様な系統を飼育する水槽室。断熱性の向上により室温管理が可能となり、照明はタイマー制御に。生き物の生活リズムに合わせ、14時間明るく、10時間暗い環境が再現されています。研究を行う教員の意見も取り入れながら、温度管理や照明環境が整えられました。



ここが変わった!  
長期滞在に  
対応する設備

#### 8 宿泊室・シャワー

国内外から研究者が滞在できるよう、宿泊室を新設。シャワー室も2室から5室へと増設され、長期の研究活動にも対応できる体制が整っています。



ここが変わった!  
水替えが  
楽になる工夫

#### 7 天井の海水蛇口

大規模な水槽室では、天井からも海水を供給できる設計に。水替え作業の負担が軽減され、研究と実習がより行いやすくなりました。



中に入ると、  
こんなに変わって  
いました!

## ちょっと見てほしい、 臨海実験所。

1979年に牛窓へ移転してから、長く使われてきた理学部附属臨海実験所。昨年4月、その中身が大きく生まれ変わりました。目の前の海を生かした研究環境はそのままに、設備や内装が新しくなりました。太陽光発電と省エネを組み合わせ、建物で使うエネルギーを実質ゼロにする『ZEB』(カギゼブ) 認証も取得しました。今回の改修で、どこがどう変わったのか。館内をのぞきながら紹介します。



ここに注目!  
エネルギーの  
「見える化」

#### 1 発電モニター・太陽光パネル

入口のモニターには、施設全体の発電状況がリアルタイムで表示されています。太陽光による発電と消費電力の関係を、その場で確認できる仕組みです。



ここが変わった!  
海を感じるデザイン

#### 3 廊下

建物に入ると、廊下には海の青をイメージしたラインが。研究施設でありながら、牛窓の環境と調和する空間づくりが施されています。



ここが変わった!  
フィールドと  
直結した水槽

#### 2 新品の水槽

改修で導入された新しい水槽では、海で採取した生き物をすぐに飼育・観察できます。床材は滑りにくい素材に変更され、これまでの動線はそのままに、より安心して利用できる空間になりました。



既存施設の改修での『ZEB』  
認証の取得は簡単なことでは  
ありません! 今ある施設を生かしな  
がら厳しい条件をクリアするため、  
施設企画部の皆さんがさまざま  
な工夫を重ねてくれました。

Next

環境への配慮と、研究現場としての使いやすさ。その両立を目指し、教員や施設担当者の声を反映しながら、臨海実験所はこれからも少しずつアップデートしていきます。

# 柔道で輝く

## 柔道で仲間と歩み、次の一步へ

### 大学生活の居場所

葛原さんは、この4月から大学院保健学研究科の放射線技術科学分野に進学予定。将来は放射線技師として医療に携わりたいことを目指す中、大学生活で鹿田柔道部に入ったことは、葛原さんにとって大きな財産となった。「最初は大学で柔道をするつもりはありませんでした。でも、仲間づくりの一環として鹿田柔道部に入って、本当によかったと思っています。」

### 柔道と出会った少年時代

柔道を始めたのは小学3年生の頃。父親の影響でテレビに映るグラッドスラム東京の試合に目を奪われ、「やってみよう」と強く思ったのがきっかけだった。中学では地区大会で優勝するなど成果を積み重ね、高校では勉強と柔道の両立に奮闘しながら基礎力を磨いた。大学入学後はアルバイトやボランティア活動にも力を入れ、柔道からは少し離れた生活を送っていた。「大学に入ったばかりの頃は、柔道はもういいかなと思っていました。でも、同級生に誘われ、2年の時に自然な流れで入部しました。」

### 仲間を支えられた日々

入部してすぐに感じたのは、部の温かい雰



## 好き! で輝く 岡山大学の学生たち

困気だった。「上下関係はありますが、厳しすぎず、部員みんなで柔道を楽しむ感覚です。」

葛原さんは背負い投げを得意とし、練習では怪我なく安全に取り組むことを心がけ、時には後輩に技を教えることもあった。「入部したばかりでも、みんなが声をかけてくれて、先輩や後輩と距離を縮めることができました。柔道を通して、人との距離がぐっと近くなったと感じます。」

大会でも実力を発揮し、関西医歯薬柔道大会では個人戦優勝、団体戦優勝にも貢献した。ただ、勝敗以上に、仲間と過ごした時間こそが、葛原さんにとって何よりの財産となった。「強い人が偉いわけではなく、強い人が経験の浅い人に優しく教えられる。そんな部であってほしい」と話す。先輩やマネージャーたちの温かい人柄に触れ、葛原さんも仲間を思いやる雰囲気を実感していった。

**鹿田柔道部で培った学びの力**  
鹿田柔道部で活動しながらも、学業に手を抜くことはなかった。卒業研究では全国学会で2度発表するなど、専門性の高い放

射線技術科学の研究に取り組む日々が続いた。その取り組みが評価され、葛原さんは学業成績に加え、課外活動やボランティアなどの総合的な活躍を顕彰する「学科長賞」を受賞。鹿田柔道部の活動があったからこそ、計画的に時間を使う習慣も身につきました。大会や稽古で培った経験は、学びを深める土台となった。

葛原 敦  
医学部保健学科 4年



## まだ知られざる歴史に挑む

### 高校時代の好奇心が扉を開く

山内さんがインド史に惹かれたのは、高校生の頃。「資料集に載っていた現地の人とイギリス人の写真を見て、どんな世界だったのか知りたいと思ったんです」と振り返る。大学進学を考える際、インド史を専門に教える先生がいることが決め手となった。1年の時に、まだ知らないことが多い東洋史の世界に魅力を感じ、東洋史研究室への所属を決めた。

### 留学で広がった研究の世界

2年の時には、岡山大学の短期留学プログラムEPOK(Exchange Program Okayama)を利用し、英国ケント大学で7カ月間学んだ。英領インド史を専門とするゼミで、イギリスの王とムガル皇帝が交わした書簡を読み解き、議論を重ねた。「史料から人々の思考を想像する面白さに引き込まれました」。その中で北インドのアワード地域とその歴史に強く惹かれていった。

### 未開拓の研究分野で見つけた面白さ

こうして興味を持ったアワード地域の歴史をもとに、研究テーマを18世紀後半のアワード地域における「パフー・ベギム」と呼ばれる高



位女性の財産管理に定めた。藩主の母として、財産に不可侵の契約を結び、地域内で独立した勢力を保持していたパフー・ベギム。その活動は、イスラム系社会において女性が明確に政治的影響力を持つ珍しい例だった。東インド会社との交渉を自らの名義で行う点も興味深い。現地の家単位での資産管理や徴税の仕組み、女性が代理人を通じて果たす役割など、制度的な側面も丁寧に掘り下げた。日本語の専門研究はほとんどなく、英語文献を読み込んで研究を進めた。アラビア語やペルシア語も自主的に学び、資料解読に役立てた。「未知の領域だからこそワクワクが止まらず、誰も踏み込んでいないテーマを探究することに、大きなやりがいを感じました」と語る。

### 歴史研究を通して身につけた力

歴史研究の魅力は、当時生きていた人々について、史料をもとに読み解き、学術

的に理解することにある。山内さんは「先行研究を批判的に読み、自分の研究の位置付けを考える姿勢は、社会でも生きる力になります」と話す。研究を通じて培った、自分で考え、判断する力が、未来を切り拓く自信につながっている。

### 自分の手で道を切り開く— これからの挑戦

「興味を持ったことに素直に向き合うことが、一番の学びでした」と山内さん。未開拓の分野に飛び込み、先行研究を読み解きながら、自分の研究を位置付けていく過程は、好奇心と努力の積み重ねそのものだった。歴史の深みに分け入り、自ら問いを立ててきた日々。その経験が、社会に出てからも自分らしく道を切り開く力となっていく。

山内 彩葉  
文学部人文学科 4年



## 歴史研究

で輝く

# OU NAVI

OKAYAMA UNIVERSITY NAVIGATION



## 石田ニコルさんを迎え、「夢」展示 スペシャルトークショーを開催



### EVENT

11月24日、共育共創コモンズ(OUX)にて、俳優・モデルの石田ニコルさんを迎え、グローバルエンゲージメントセンター主催「夢」展示スペシャルトークショーを開催しました。

本学は文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」に採択され、多文化共修プログラムを推進しています。教養教育科目「地球社会の課題解決を仕事に」では、学生が日本語と英語で自身の「夢」を言語化し、約70点を「岡大生の夢」として中央図書館に展示。本イベントはその最終日に合わせて実施されました。

トークショーには横井篤文副学長、One Young Worldミュンヘンサミット参加者や本学学生からも登壇し、「夢」をテーマに対話を展開。約60人が参加しました。石田さんは、大学在学中にモデルとして活動を始めた経緯や、「今しかできないことに挑戦したい」と進路を決断した経験を紹介。さらに、海を守りたいという思いからサンゴに配慮した日焼け止めを企業と開発した取り組みも語りました。

「夢が変わっても根底の思いはつながる」「迷ったらドキドキする方へ」—参加者に向けたメッセージが会場を温かく包みました。



## 富樫庸介教授が第22回(令和7年度) 日本学士院学術奨励賞を受賞



### AWARD

岡山大学学術研究院医歯薬学域の富樫庸介教授が、第22回(令和7年度)日本学士院学術奨励賞を受賞しました。本賞は、優れた研究成果を挙げた若手研究者のうち、今後の活躍が特に期待される研究者に授与されるものです。授賞式は2月3日、東京都の日本学士院で行われました。

受賞対象は「ミトコンドリア伝播による新たながん免疫逃避機構の解明」。富樫教授は、がん細胞が持つ変異ミトコンドリアがリンパ球へ移行し、その機能を低下させることで、がんが免疫から逃れる仕組みを明らかにしました。この発見は、がん免疫逃避に新たな視点を示すとともに、免疫療法の患者層別化や新規治療法の開発にもつながる成果として高く評価されています。

富樫教授は「研究室立ち上げ当初に出会った着想から始まった研究。多くの支えに感謝している」とコメント。今後は、ミトコンドリア伝播を抑制する治療法の可能性など、基礎と臨床の両面から研究を進めていくとしています。



## 株式会社廣榮堂と 「きびだんご」の伝統継承と新たな 価値創造へ総合的連携を開始

### AGREEMENT

本学は、11月の定例記者発表において、老舗和菓子店株式会社廣榮堂との総合連携を発表しました。看板商品「きびだんご」の原材料確保や品質継承を、大学の研究力で支える取り組みです。

安政3年(1856年)創業の廣榮堂では、特別栽培もち米の生産農家の高齢化により、原材料の安定調達が課題となっていました。これに対し、本学の犬仲克俊准教授が若手農業経営者との連携を実現し、新たな産地での共同作付け体制を構築。持続的な原料確保に道筋をつけました。

さらに本学と秋田県立大学との共同研究により、もち米の育成条件やデンプン構造が食感や風味に与える影響を科学的に解析。経験に支えられてきた「伝統の味」をデータで継承し、さらなる価値向上を目指します。

加えて、MS&ADインターリスク総研株式会社と連携し、「むかしきびだんご」のカーボンフットプリントを算定。環境配慮が購買行動に与える影響も検証しました。地域に根差す企業とともに、新たな価値創造と社会課題の解決に挑みます。

## 岡山大学 J-PEAKSシンポジウム ～地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (J-PEAKS)による大学改革の最前線～

### EVENT

本学は1月27日、岡山大学J-PEAKSシンポジウム「J-PEAKSによる大学改革の最前線」を岡山コンベンションセンターで開催しました。対面とオンラインのハイブリッド形式で実施し、300人以上が参加しました。

本シンポジウムは、文部科学省の「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」採択大学としての取り組みを共有し、大学間連携やネットワーク強化を図ることを目的としたものです。冒頭では、本学データサイエンス部の学生が制作した那須保友学長のアバター映像が上映され、その後、那須学長が登壇。改革への覚悟と今後の展望を語りました。

基調講演では、内閣府本府参与の上山隆大氏が大学経営の進化について講演。続いて那須学長が、研究開発マネジメント人材認定制度や共生型連合体によるイノベーション創出など、本学の挑戦を紹介しました。「競争」から「共創」へと転換し、「ファーストベンチン」として改革に挑む方針を共有しました。パネルディスカッションでは、九州工業大学、千葉大学、長岡技術科学大学の登壇者らとともに、社会変革に向けた大学群の連携について活発な議論が交わされました。

午後はテーマ別セッションを実施。大学間連携や地方創生、人材育成を軸に議論を深めました。本学は、岡山大学長期ビジョン2050「地域と地球の未来を共創し、世界の革新に寄与する研究大学」の実現に向け、J-PEAKSを推進的に研究力の強化とイノベーション創出を着実に進めていきます。



### PICK UP!



## 「岡山EXPOラボ2025—次世代と 創る地域の未来—」を開催

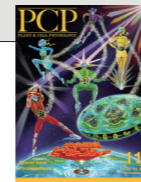
12月20日、本学津島キャンパス大会館にて、SDGsアンバサダーを中心とする学生団体「OU!万博」が「岡山EXPOラボ2025—次世代と創る地域の未来—」を開催しました。本イベントは、大阪・関西万博での学びを岡山へ届け、「楽しい」を入口にウェルビーイングを考える」ことを目的としたものです。

会場では1・2階ステージや屋外広場を活用し、多彩なプログラムを展開。万博マニア・二神敦氏によるクイズ大会をはじめ、地域の中・高校生ら15団体以上が演奏や演舞を披露しました。20を超える体験ブースでは、本学学生団体との協働企画や地域団体によるワークショップ、VR消防体験、液状化実験、ポッチャ体験などが並び、子どもから大人までが未来社会を楽しく体感しました。屋外には8台のキッチンカーも出店し、会場は祝祭感に包まれました。

エンディングでは附属小学校児童と本学ダンス部が万博テーマソングに合わせてパフォーマンスを披露。来場者も加わる総踊りで幕を閉じました。このイベントをもって「OU!万博」は2年間の活動を終了しましたが、万博を通じて育まれた地域とのつながりや志は、今後も学生一人ひとりの挑戦へと受け継がれていきます。本学はこれからも、学生が未来を創り出す力を応援します。



### press release プレスリリース



## 光合成の主役はヒーローだった? 「光合戦隊ヒカレンジャー」が 表紙を飾る国際特集号を発行

学術研究院先鋭研究領域(資源植物科学研究所)の坂本亘教授と、同(異分野基礎科学研究所)の沈建仁教授がGuest Editorを務めた光合成研究の国際特集号が、植物科学分野の主要学術誌 *Plant and Cell Physiology* (Oxford University Press) より2025年11月に発行されました。

特集号「*Photosynthesis – the basics, mechanisms, and applications*」は、光エネルギー変換の基礎や分子機構、制御、進化、さらには農業や人工光合成への応用までを幅広く網羅。2024年に神戸で開催された第2回アジア・オセアニア光合成国際会議の成果を中心に、世界最先端の研究19編を収録しています。

光合成を担うタンパク質複合体をヒーローに見立てた表紙も大きな特徴です。坂本教授は「基礎から応用まで俯瞰し、光合成研究の現在地を示した」とコメント。沈教授も「食料生産や持続可能なエネルギー技術につながる重要分野。岡山大学から国際的発信ができた意義は大きい」と述べています。

2026.2.1着任

## 岡山大学 新任教員紹介!

※所属等は着任時のものです。

小川 厚徳  
OGAWA Atsunori

学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 教授

### ■ 研究テーマ

人と人、人と機械が  
“自然に理解し合える”世界をつくる!

### ■ ひとこと自己紹介

研究に全力で取り組む一方、卓球で体を動かしたり、ガンブラ制作に没頭したりと、オンとオフのメリハリを大切にしています。

### ■ 学生へのメッセージ

研究や研究室のイベントに主体的に取り組む意欲ある学生を歓迎します。挑戦する気持ちを全力でサポートします。



### 2025 11月 大学の動き(2025年11月～2026年2月)

- 1日 ● 「岡山大学ホームカミングデイ2025」開催  
● 第8回金光賞・第8回金光功労賞・第5回金光奨励賞の授賞式を開催  
● 内山工業株式会社とネーミングライツ・パートナー契約締結
- 3-6日 ● 本学学生が日本代表として次世代リーダー・グローバル・サミット One Young World 2025に参加
- 14日 ● 氏原岳人准教授が令和7年度(第52回)岡山市文化奨励賞学術部門を受賞
- 17日 ● UNCTADと本学の共同プログラム5周年記念レセプションを国連本部で開催

- 1日 ● 洋菓子メーカーの株式会社サンラヴィアンとカーボンフットプリントを通じた企業ブランド価値向上に関する共同研究を開始
- 5日 ● 国立六大学連携コンソーシアムと台北大学連盟による第5回ジョイントシンポジウムをハイブリッド形式で開催
- 8日 ● OKAMUN(岡山模擬国連)を岡山大学で初開催  
● 両備グループと岡山大学生協との連携による「学生応援プロジェクト」を開始

- 13日 ● 本学と日本電子株式会社による研究機器のレンタル(リース)プラットフォーム「Shared Transformation(SX)プラットフォーム」のホームページを開設
- 19日 ● 一般社団法人PMI日本支部とプロジェクトマネジメントに関する組織間連携協定を締結
- 27日 ● 学生起業家の登竜門「キャンパスベンチャーグランプリ(CVG)中国大会」で本学学生が最優秀賞・特別賞・奨励賞を受賞

- 17日 ● 保健学研究科とタイのマハサラカム大学看護部が国際交流協定を締結し、調印式を挙行政
- 21日 ● 中四国9大学が集結する「第2回PSI学生アイデアピッチin徳島」で本学大学院生が受賞
- 23日 ● PSI博士人材育成プログラム(NUS GRIP)に本学学生が採択。シンガポール現地研修を開始

学生の活躍発信中!  
岡山大学公式 SNS  
ぜひフォローしてください!



X(旧:Twitter)



Instagram



Facebook